

砂漠の国、水の国

青森県立三本木高等学校附属中学校

一年 野坂 創一

どこまでも続く白い砂漠。月の光に照らされてまるで地球ではない別の星に生きているような不思議な気持ちにさせられる。

一昨年の冬休み。僕は小学校一年生まで暮らしたエジプトに四年ぶりに戻った。そこで大好きな「砂漠キャンプ」へ出かけたのだ。

ここでは、ペットボトル一本だけの水を最後まで大切に使う。夕飯のスープはトマトの煮汁だけです。食器は食後のお茶を沸かした残り少しのお湯と砂で洗う。もちろん、水洗シャワートイレなんて無い生活をする。

朝起きる。バナナとお茶で朝食をとる。黒い鉄鉱石の固まりがごろごろと転がっている黒砂漠を歩く。砂漠は夜は寒いくせに、日中は急に暑くなる。一月といえは、十和田は雪で埋まっているのに、僕は帽子をかぶり、タオルを巻いて日差しを防止しているのだ。三十分は歩いただろうか。日本にいたらここで休んでスポーツドリンクをがぶ飲みしているところだ。しかし、ここは砂漠である。ペットボトルからはんの少しの水を口にする。わずかな水を大事に、大事に乾いた口の中でゆらす。口の渴きがとれ、水が体温ぐらいいたら今度はゆっくりとのどに流しこむ。これがボク流砂漠の水の飲み方だ。こうして飲む水は牛乳のように味が濃い。「命の水」とはこのことだ。また足を動かせるようになる。

幼い頃は何本もの水を母にねだりながら砂漠を歩いてた僕もやっと「水を大切に使う知恵」を身につけていたのだ。

それから半年も過ぎた小学校生活最後の夏休み。教員をしている父が、「ちよつと手伝いをしてくれないか。」

と、言ってきた。小学生のために、田んぼの水はどこから来ているのかという教材

を作るというのだ。

夏休みの暑い日だった。父の車は緑色の稲がぐんぐんと育ち、風になびいて芸術作品のように見える田んぼについた。

「この水はどこからきていると思う。」

「近くの川。」

「半分正解。」

続いて用水路をたどった。だんだんと八甲田山に近づいてきた。

「向こうにダムが見えるだろう。この用水路の水もダムの水も水源は同じなんだ。」もつと上流に行くと川は大きくなった。

そこにはコンクリートの傾斜があり、鉄製の赤い大きな蛇口があった。

「ここが取水口。奥入瀬川の水はここからさっきの用水路に分かれる。」

ゴーゴーという音を立てて川の水は流れていた。冬休みに歩いた砂漠とは正反対の風景だ。

そこから車にのり、十和田湖に着いた。

車を降りて、湖面の見える小高い丘を登った。

「あの鉄門の奥に田んぼの水の水源がある。青ブナ取水口と言って水がるり色に輝く場所だ。」

「水は飲料だけでなく、作物を育て、エネルギーを起こし、観光にも使われているという事を教えたいんだ。」

葉っぱの陰でよく見えなかった分、僕の頭の中には「青ブナ取水口」の美しい色が想像ができた。

きつと父は、子どもたちをそこに連れて行くんだなと思った。

水の少ない砂漠の地で「水を大切に使う知恵」を身につけることができた。そして水の豊かな十和田で「水を多目的に使う知恵」も知る事ができた。

エジプトと日本。砂漠と水の豊かな街。条件の違う二つの国で生活した僕は、ペドウィンの知恵と十和田湖の水を守り活用している人の知恵を多くの人に伝えていきたいと思った。